

## 大学生におけるスポーツの便益構造

### An Analysis of the Benefits of Sports for College Students

洲 雅 明

Masaaki SUGA

清 水 富 弘\*

Tomihiro SHIMIZU

田井村 明 博\*\*

Akihiro TAIMURA

#### ABSTRACT

The purpose of this research paper is to analyze the need for sports for college students. By using Takekuma's test (1991), the questionnaire was given to adults all over Oita city. The benefits of sports were analyzed by factor analysis and comparisons were made between 1) college students and other adults, and 2) male and female students.

The results obtained are summarized as follows :

- 1) As a result of factor analysis, the benefits of sports were divided into 9 factors : "accessibility", "information", "communication", "facilities and clubs", "trends", "training", "motivation", "instruction" and "skill improvement".
- 2) As for the comparison between college students and other adults, college students expect more benefits from "communication", "trends", "training" and "skill improvement" than other adults, and fewer benefits from "information" and "instruction" than other adults.
- 3) As for the comparison between male and female students, male students expect more benefits from "communication", "training" and "skill improvement" than female students, and fewer benefits from "motivation" and "instruction" than female students.

In conclusion, college students want to cultivate mutual friendships among themselves through sports. Male students especially want to improve their skill in sports through personal programs given to them according to their own abilities. As for female students there is a need for sports to help in shaping up.

---

\*大分大学教育学部 Faculty of Education, Oita University

\*\*長崎大学教養部 Faculty of Liberal Arts, Nagasaki University

## I. 緒 言

今日、生活様式や余暇活動、消費者行動の多様化によって、スポーツ産業は、スポーツ消費者のニーズ (needs) やウォンツ (wants) を考えた経営、商品開発が必要となってきた<sup>2)3)4)5)8)9)12)13)</sup>。ニーズとは消費者の生活上の必要性、ウォンツとは消費者の趣味・価値観・文化性の欲求であり、現在のマーケティング論においては、市場の変化に対応するために、これらを明らかにし、いかなる商品・サービスを市場に提供するのかを考えるといった消費者 (顧客) 志向の経営活動を問題にすることが主流である<sup>6)7)</sup>。

スポーツ消費者のニーズやウォンツは、性、年齢、職業などによって異なってくる<sup>12)13)</sup>。大学生においては、正課体育実技や課外活動で様々なスポーツを行っており、学外でも様々なスポーツが行える団体・施設・機会に接している。そのような場では、発育発達に適した内容や生涯スポーツに結びつく内容を計画し、行っていくことが大切であるが、大学生のスポーツに対するニーズやウォンツが反映されていく必要もある。

スポーツに関するニーズやウォンツを把握する方法として、本研究では、将来の購買行動を的確に予想できる技法のひとつといわれる「ベネフィット・セグメンテーション (便益分析)」<sup>14)</sup>を利用した。ベネフィットとは、消費者行動の原因となる要因そのもので、商品に対する消費者の欲求、価値、意識、態度といったものの総称<sup>14)</sup>であり、「こうだったら自分にとって都合がよいという消費者にとっての利益」を示す概念である。従って、スポーツに関するベネフィット・セグメンテーションとは、個性化・多様化するスポーツ消費者を、彼らのスポーツに対する様々なニーズやウォンツの程度から、比較的同質なグループに分割する技法である。これを用いることで、スポーツ消費者のスポーツに関するニーズやウォンツの要因構造が明らかになることが期待される。

そこで本研究では、大学生のスポーツに関するニーズやウォンツを知るためにアンケート調査を行い、大学生と大学生以外の成人 (以下「一般」とする)、大学生の男子と女子の間のニーズやウォンツの違いを考察しようとした。そのために、スポーツに関するベネフィットの構造化を行い、大学生と一般、大学生の男子と女子において便益期待の比較を行った。そしてそれによって、大学における体育実技やサークルなどの課外活動、また、様々なスポーツ活動に役立てるための基礎資料を得ることを目的とした。

## II. 研究方法

### 1. アンケート内容

以下のような項目のアンケートを作成した。

- 問1 (1) 性別 (2) 年齢 (3) 職業 (4) 休日 (5) ゆとり (6) 世帯構成
- 問2 体力の自己診断
- 問3 運動やスポーツの実施
- 問4 運動やスポーツの機会と頻度
- 問5 運動やスポーツに使った費用
- 問6 運動やスポーツに関する便益について

## 大学生におけるスポーツの便益構造

問1から問5までは、サンプルである大学生と一般の特性を調査する項目であり、それぞれの質問について、数項目の選択肢または該当する数を記入する形式で回答を求めた。

問6の「運動やスポーツに関する便益について」は、武隈<sup>13)</sup>の45項目からなる質問尺度を援用した。これは、あらかじめスポーツの効果、スポーツによる人的交流、スポーツ施設、スポーツプログラム、指導者、トレーニング、スポーツ関連情報、スポーツ利用上のアクセサビリティ、アメニティ、ファッション性など多面的にベネフィット要因を提示したものである。質問方法は、「もしあなたが今からスポーツを行うとすると、以下の質問がそれぞれどの程度重要であると思うか」を問い、「非常に重要である(5点)」「かなり重要である(4点)」「少し重要である(3点)」「あまり重要でない(2点)」「まったく重要でない(1点)」の5段階選択肢によって回答を求めた。

### 2. 調査手順

大学生に対しては、大分市内にある大学2校において正課体育時の前後にアンケートに回答してもらい回収した。

一般に対しては、大分市(人口416,600人、1993年6月現在)全域に渡って調査を行った。性、職業、年齢などデモグラフィック特性が偏らないようにするために、調査地域全域に広く分散するように注意して調査用紙を事業所、民家などに2,400部配布し、1～2週間後に回収した。配布および回収は直接または間接的に行った。

調査実施期間は、大学生、一般とも1993年6月2日から6月18日であった。

### 3. 分析方法

#### (1) サンプルの特性について

問1～問5の質問項目に関して、比較を①大学生と一般(職種別)、②大学生男子と大学生女子(性別)について単純集計を行い、人数に対する割合(%)を算出した。

#### (2) スポーツに関するベネフィット(便益)について

「かなり重要である」から「あまり重要でない」までの5段階評定の数量化にあたっては、5点から1点までの得点を与え、間隔尺度を構成するものと仮定した。全有効回収標本数において、スポーツに関するベネフィット(便益)の構造を把握するために、因子分析を用いてスポーツに関するベネフィット(便益)因子の抽出を行った。因子の抽出においては主因子法を、因子軸の回転にはバリマックス直交回転をそれぞれ用いた。

そして、①大学生と一般、②大学生男子と大学生女子について、因子分析の結果からグループごとの因子得点を算出し、比較を行った。有意差の検定には、t検定ならびに分散分析(ANOVA)を用いた。

なお、これらのデータを演算処理するにあたっては、データ解析ソフトウェアSPSS Macintoshを用いた。

#### 4. 用語の解説

##### (1) 運動生活の階層 (図8)

- C 地域・職場・学校のスポーツクラブ（運動部）や同好会の練習に週1日（年50日）以上参加している人。他の条件は問わない。
- A+PL 民間のスポーツ施設、公共の運動施設、公園、道路、野外活動施設などで自由に（個人的に）運動やスポーツを週1日（年50日）以上行っている人（A）。および民間のスポーツ施設におけるスポーツスクール・レッスン、市町村や公共の運動施設によって主催されるスポーツ教室に月1日（年12日）以上参加している人（PL）。他の条件は問わないがCの階層に含まれる人を除く。
- Ps 地域・職場・競技団体などの主催するスポーツ行事・大会に年1日以上参加した人。ただしCおよびA+PLの階層に含まれる人を除く。
- S(1) 過去1年間に何らかの運動やスポーツは行っているが、上の三つの階層に含まれない人。
- S(2) 過去1年間に運動やスポーツをまったく行っていない人。
- S S(1)とS(2)を合わせたもの。

##### (2) ベネフィット（便益）

こうだったら自分にとって都合がよいという「スポーツ消費者」にとっての利益。

### III. 結果と考察

#### 1. 調査対象について

有効回収標本数および回収率はそれぞれ1646、68.6%であった。内訳は、大学生男子133人、大学生女子322人、大学生合計455人、一般合計1191人であった。また、一般の年齢分布を図1に、職種を図2に示した。年齢に関しては、20代、30代、40代で8割を占め、また、この3つの年代がほぼ均等に分布している。職業に関しては、農林漁業がほとんど分布せず、事務職、主婦が2割強ずつで多く分布している。

表1 標本の構成

	大学生(%)	一般(%)
男子	133(29.2)	513(43.1)
女子	322(70.8)	678(56.9)
計	455(27.6)	1191(72.4)

## 大学生におけるスポーツの便益構造

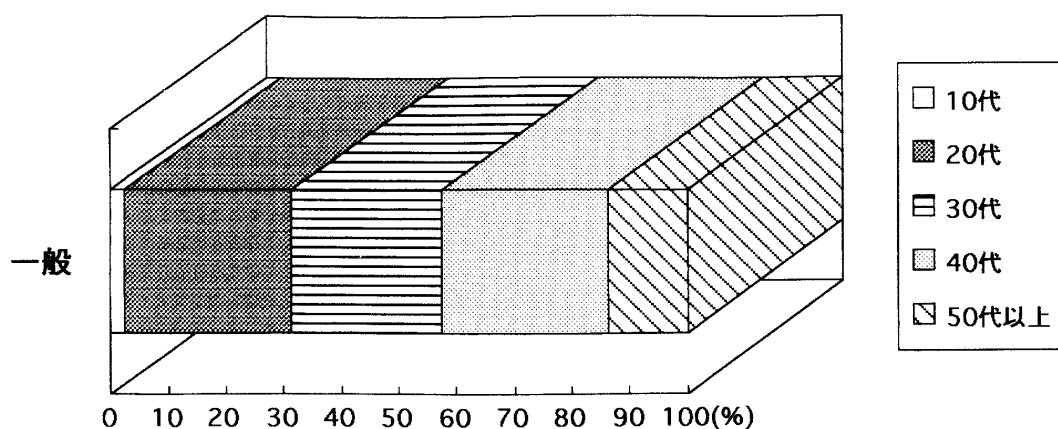


図1 一般の年齢構成

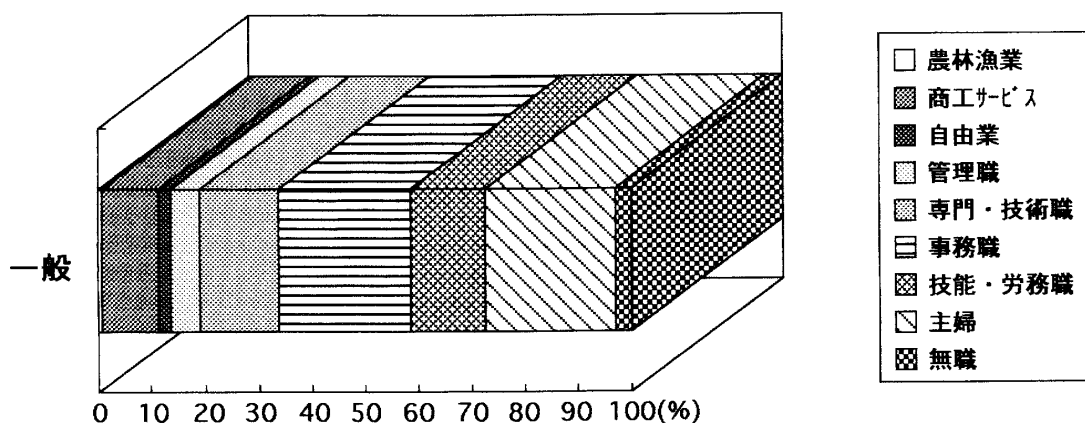


図2 一般の職業

## 2. サンプルの特性について

### (1) 休日について

図3に、「あなたは完全な休日を、ひと月にどれ位とることができますか」という質問に対する結果を示した。大学生は職に就いておらず、休日という意味は一般とは違うが、授業やアルバイトなどがなく全く自由に一日を使える日という意味で回答してもらった。「8日以上」、つまり週休2日以上の方が大学生は54.3%いるのに対して、一般は33.6%であった。また、「3日以下」、「4～5日」の者は大学生（28.6%）に比べ圧倒的に一般（41.2%）が多かった。大学生の方が明らかに休日が多いことがうかがえる。大学生を男女別にみた場合、「3日以下」の割合が男子6.8%、女子14.0%と圧倒的に女子が多かったのが特徴である。

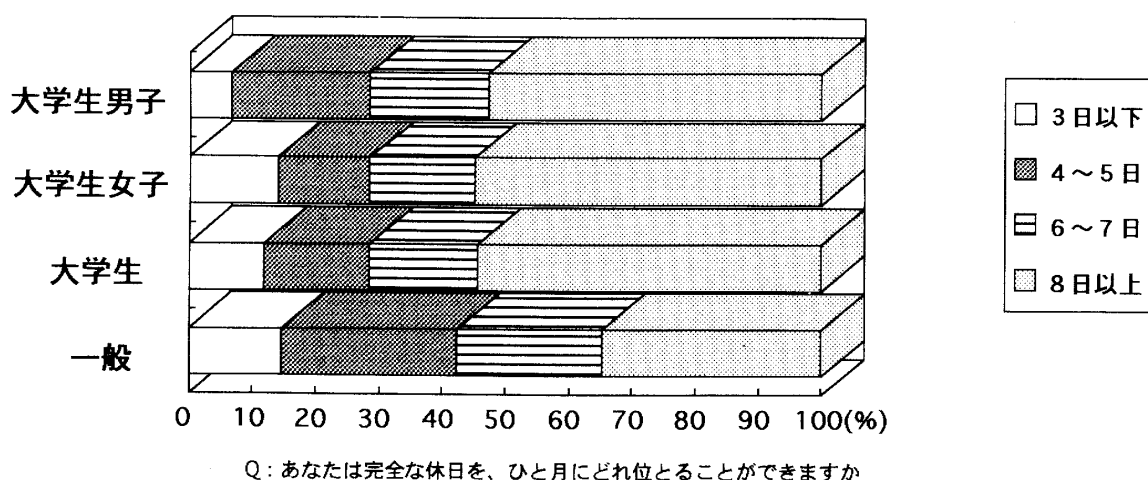


図3 休日

(2) ゆとりについて

図4に、「あなたのふだんの生活は、仕事や家事、学業などで精一杯ですか。それとも好きなことをしたり休むゆとりがありますか」という質問に対しての結果を示した。「ある」（かなりある＋ある程度ある）と答えた人が一般、大学生とも6割を越えた。総務庁青少年対策本部編「現代青年の生活と価値観」<sup>14)</sup>によると「あなたは、自分の余暇時間が十分にあるほうだと思いますか、少ないほうだと思いますか」という問いに対して、「ある」（十分にある＋かなりある）と答えた人が44.8%、「ない」（あまりない＋ほとんどない）と答えた人が54.9%と、若干質問の意味は違うものの、本研究とは逆の結果となった。また、「ほとんどない」と答えた人が、大学生（7.7%）と一般（11.6%）で若干差があった。大学生を男女別にみた場合の差はほとんどみられなかった。

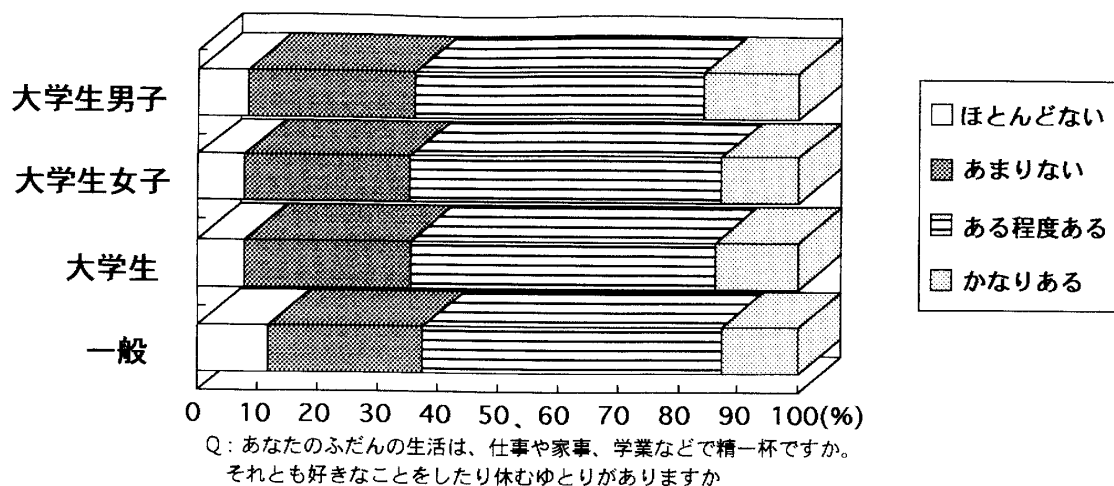


図4 ゆとり

(3) 世帯構成について

図5に、「あなたの世帯構成はどれにあてはまりますか」という質問に対しての結果を示した。大学生はその属性（職業と年齢）から、一般と比べ「1人住まい」（25.5%）と「3世代世帯」（20.2%）の割合が高かった。大学へ通うために親元を離れての「1人住まい」、また、一般に比べ年齢が低いので祖父母が健在なため「3世代世帯」の割合が高くなったと考えられる。一般においては、「2世代世帯」がもっとも多く60.0%を占めた。

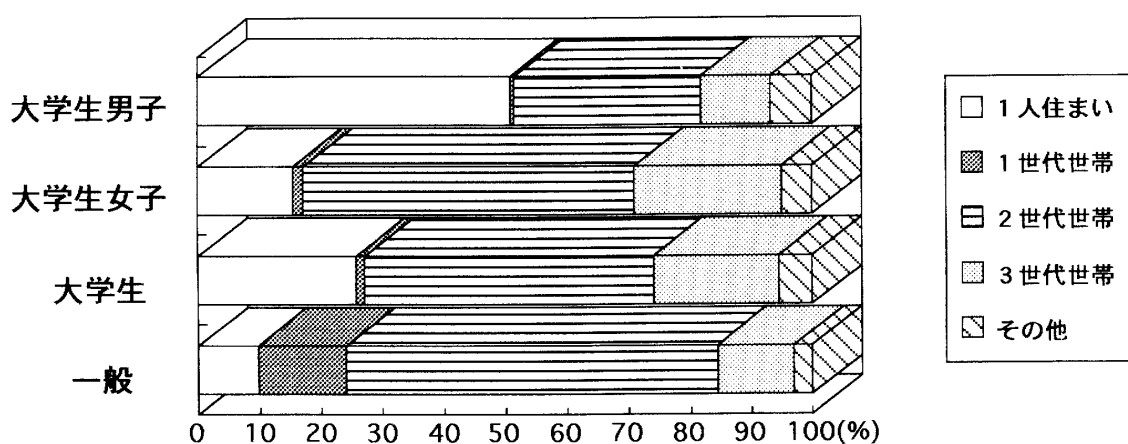


図5 世帯構成

(4) 体力について

図6に、「あなたのご自分の体力についてどのように感じていますか」という質問に対しての結果を示した。一般と大学生においては、ほとんど同じ割合であり、「普通である」と答えた人が6割強を占め、「不安がある」（21%）と答えた人のほうが「自信がある」（13~14%）と答えた人を上回った。大学生を男女別にみた場合は、「自信がある」と答えた人は女子（9.3%）よりも男子（25.6%）が多く、「不安がある」と答えた人は男子（13.5%）よりも女子（24.2%）が多かった。

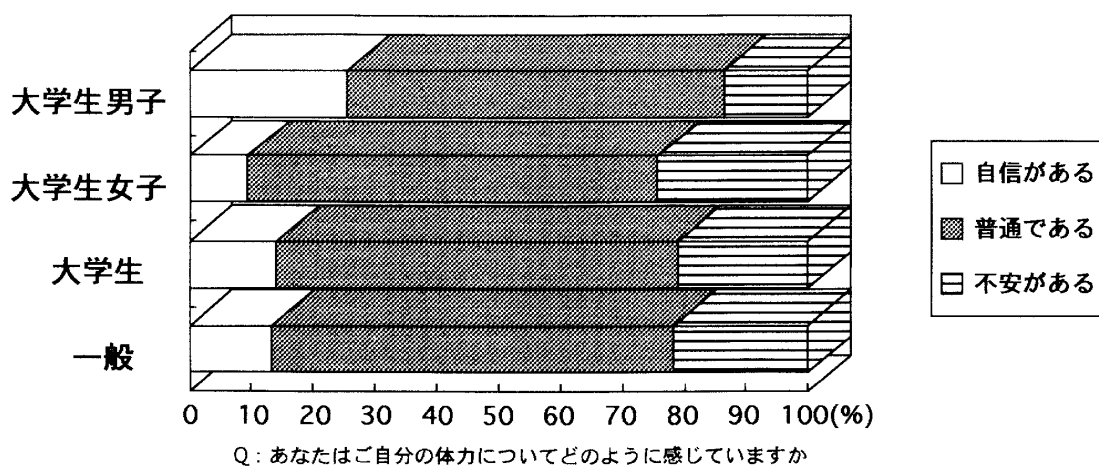


図6 体力

(5) 過去1年間の運動の機会について

図7に、「あなたは過去1年間に、何らかの運動やスポーツを行いましたか」という質問に対しての結果を示した。大学生（80.9%）の方が一般（67.8%）よりも「行った」と回答した人が多かった。全体的にみても約7割の人が何らかの運動を1年間に行っていることがわかる。また、大学生を男女別にみた場合にも、「行った」と回答した割合に顕著な差が現われ、女子が75.5%であるのに対し男子では94%であることが明らかになった。

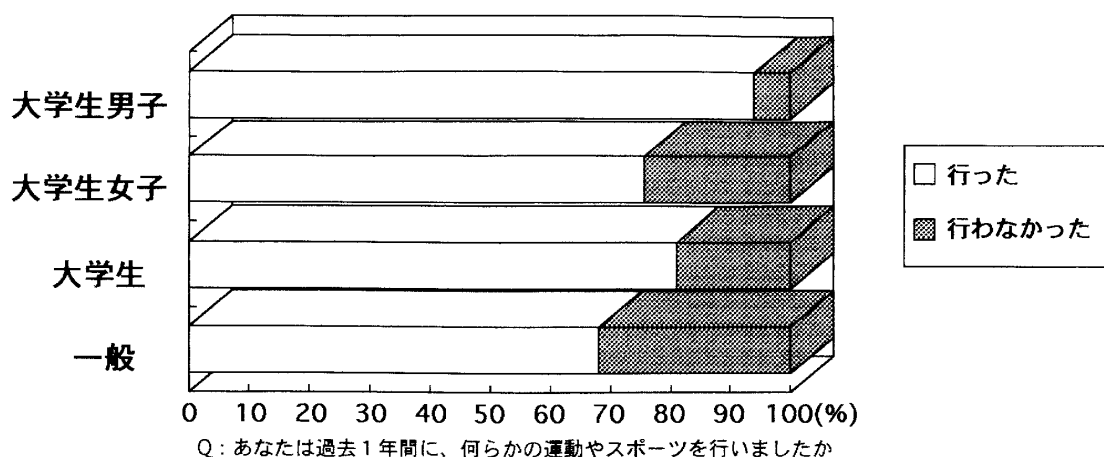


図7 スポーツの実施

(6) 運動生活の分類

図8に、「あなたはどのような運動やスポーツの機会があり、どのくらい行いましたか」という質問によって運動生活を分類した結果を示した。「行っていない人」であるS(2)は、大学生（19.1%）の方が一般（31.7%）よりも少なかった。また、「行っている人」でみると、Cは大学生（32.5%）の方が一般（15.2%）よりも、A+PLは一般（15.1%）の方が大学生（8.1%）よりも多くなった。大学生は、身近にある学校のクラブや同好会を利用していることが伺える。

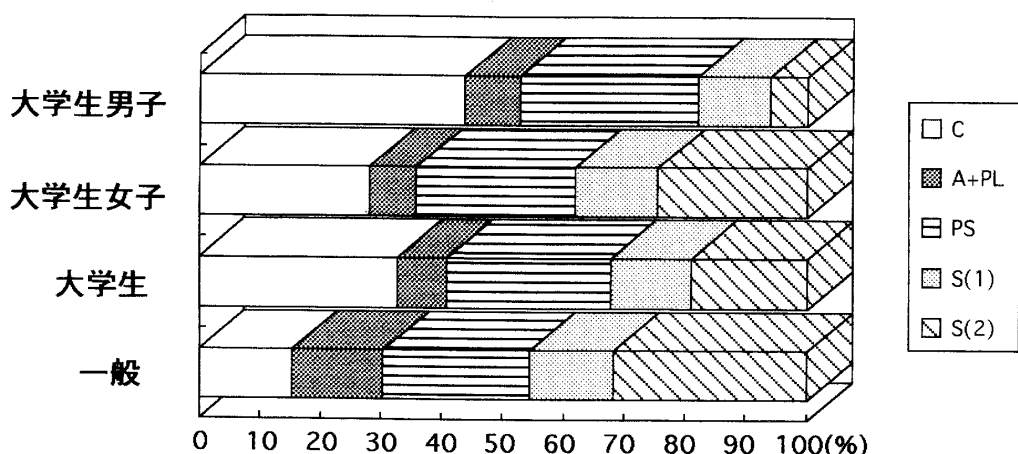


図8 運動生活の分類



## 大学生におけるスポーツの便益構造

大学生を男女別にみた場合には、行っていない人 S(2) が男子 (6.0%) に比べ女子 (24.5%) が多く、C で行う人が女子 (28.0%) に比べ男子 (43.6%) の方が多くなっているのが特徴的である。

### (7) スポーツ・運動に使った費用

図9に、「あなたは過去1年間に、運動やスポーツを行うためにどれくらいのお金を使いましたか」という質問に対しての結果を示した。全体的にみると、使わなかった人が3割強、1万円未満が2割、1～5万円が2割、5万円以上が2割となった。大学生と一般の大きな違いは、大学生は1万円未満が多く、10万円以上が少ないことである。しかし、このことは、大学生女子に特徴的なためであり、大学生男子と大学生女子を比較してみると、大学生男子は使わなかった割合 (15.0%) は女子の半分以下、5～10万円 (15.8%)、10万円以上 (12.0%) ではそれぞれ、女子の3倍以上の割合を占めた。このことから、一般では使わない人がはっきりとしており、あとは1万円から10万円の区分の中でほぼ均等に分布しているが、大学生の男子は使わなかった人が少なく、1～5万円を中心に幅広く分していることがわかる。

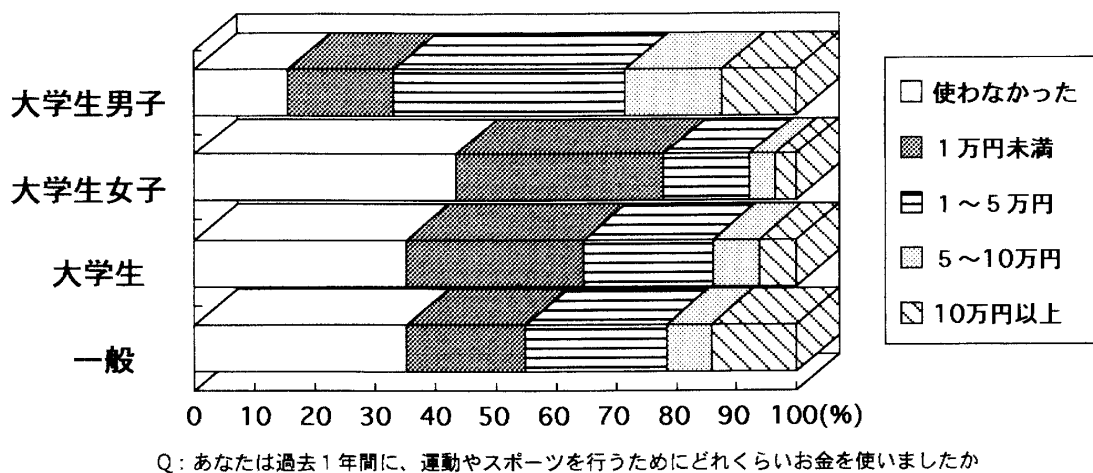


図9 スポーツの費用

以上、(1)から(7)までの結果をまとめると、次のようなことが考えられる。

大学生の方が一般に比べ肉体的にも精神的にも暇やゆとりがあるようである。大学生男子は年齢的にみても体力的に自信があり、スポーツを主にクラブ活動や同好会において行っているようであるが、大学生女子は一般と同程度である。そのためか、大学生男子はスポーツにある程度お金を使っているようであるが、女子はそうとはいえないようである。

## 3. スポーツに関する便益について

### (1) スポーツに関する便益の因子構造

表2に示すように、スポーツに関する便益の因子分析の結果、固有値1.0以上の9因子を抽出した。これらの寄与率は、第1因子が29.7%であるのに対し、第2因子から第9因子まではそれぞれ10%以下と小さくなった。累積寄与率は67.3%となり、全分散の約7割を9つの因子で

表 2 便益の因子構造

(バリマックス回転後の因子負荷量)

<b>第 1 因子：アクセサビリティ (寄与率 29.7%)</b>	
シャワー・ロッカー・更衣室・トイレなどが充実していること	.788
施設が混みすぎでないこと	.769
施設の職員や従業員の態度が良いこと	.767
スポーツをする場の雰囲気が快適であること	.754
スポーツをするためにあまりお金がかからないこと	.692
安全にスポーツを行えること	.661
スポーツをする施設や場所までの交通の便がよいこと	.635
<b>第 2 因子：スポーツ情報 (寄与率 8.2%)</b>	
いつどんなスポーツ教室やスポーツ行事が行われるのかという情報	.812
どこにどんなクラブや同好会があるのかという情報	.789
どこにどんな指導者がいるのかという情報	.684
どこにどんなスポーツ施設があるのかという情報	.682
練習やトレーニングの方法、スポーツに関する科学的な知識などの情報	.672
健康や体力に関するスポーツ医学的な検査や相談が気軽にできること	.512
<b>第 3 因子：スポーツ仲間 (寄与率 7.4%)</b>	
スポーツにより地域・近隣の人々との交流を深めること	.797
スポーツにより友人・知人との親睦を図ること	.784
スポーツにより職場・仕事関係の人々と交流を深めること	.762
スポーツにより家族とのふれ合いを増やすこと	.695
<b>第 4 因子：スポーツ施設・スポーツクラブ (寄与率 5.8%)</b>	
スポーツする場所 (スポーツ施設) が身近にあること	.761
場所 (施設) 探しで苦労しなくてすむこと	.755
一緒にスポーツをする仲間の集まり (クラブや同好会) が身近にあること	.694
施設にスポーツ用具や器具が整っていること	.593
<b>第 5 因子：トレンド (寄与率 4.2%)</b>	
最近流行している、あるいは流行しそうなスポーツを行うこと	.858
流行やブランドもののスポーツウェアやスポーツ用品・用具でスポーツをすること	.857
高級な施設でスポーツを行うことによって、高級感を感じることができること	.845
スポーツをした後に、仲間とおしゃべりをしたり、お茶やお酒を飲んだりすること	.438
旅行先などで、好きなスポーツをすること	.418
<b>第 6 因子：個別的・合理的トレーニング (寄与率 3.4%)</b>	
自分のペースで練習やトレーニングができること	.773
自分にあった内容の練習やトレーニングができること	.764
練習やトレーニングを継続的に行うこと	.666
練習やトレーニングを計画的に行うこと	.646
<b>第 7 因子：スポーツの効用 (寄与率 3.2%)</b>	
スポーツによって体力を維持・向上させること	.794
スポーツによって健康を保つこと	.794
スポーツによる美容や肥満解消 (シェイプアップ)	.653
スポーツによってストレスの解消や気晴らしをすること	.570
スポーツを楽しむこと	.375
<b>第 8 因子：指導者・スポーツプログラム (寄与率 2.9%)</b>	
指導者が技術的にすぐれ、積極的に技術指導してくれること	.712
指導者が、健康・体力づくりなどについて実際的な方法を指導してくれること	.694
指導者が仲間づくりなど面倒みがよく、グループ活動の楽しさを指導してくれること	.673
気軽に参加できるスポーツ教室やスポーツ行事が開かれること	.486
<b>第 9 因子：技能向上 (寄与率 2.5%)</b>	
スポーツの技能や記録を向上させること (うまくなること)	.692
ひとつのスポーツ種目を徹底的に行うこと	.622
競技成績や一定の技能水準に対して、表彰や認定を受けること	.569

説明できることとなる。この因子数は、武隈<sup>13)</sup>の研究におけるものと同数であり、また、因子の順序や因子に含まれる項目においてもわずかに相違がみられただけであった。

表2には、これら9つの因子をバリマックス回転させ、スポーツに関する便益の項目について、それぞれの因子負荷量の大きさの順に並べた結果を示した。これら9つの因子は、スポーツに関する便益の項目との関係を因子負荷量の大きさによって検討、解釈することにより、第1因子「アクセサビリティ」、第2因子「スポーツ情報」、第3因子「スポーツ仲間」、第4因子「スポーツ施設・スポーツプログラム」、第5因子「トレンド」、第6因子「個別的・合理的トレーニング」、第7因子「スポーツの効用」、第8因子「指導者・スポーツプログラム」、第9因子「技能向上」のように命名することにした<sup>10)</sup>。

第1因子は、施設・設備の整備や充実、雰囲気、従業員の態度、交通の便など、スポーツの場への近づきやすさを示すことから「アクセサビリティ」因子とした。第2因子は、スポーツサービスをめぐる様々な情報、スポーツに関連する情報を示すことから「スポーツ情報」因子とした。第3因子は、一緒に練習やトレーニングをする仲間を示すことから「スポーツ仲間」因子とした。第4因子は、スポーツを行う場所、器具、団体を示すことから「スポーツ施設・スポーツプログラム」因子とした。第5因子は、スポーツに関連した流行やブランドへの関心を示すことから「トレンド」因子とした。第6因子は、継続的・計画的に行うことができる自分に適した練習やトレーニングを示すことから「個別的・合理的トレーニング」因子とした。第7因子は、健康や体力の維持・増進、ストレスの解消、美容、楽しみなど、スポーツを行うことによって直接もたらされる様々な価値や効用を示すことから「スポーツの効用」因子とした。第8因子は、インストラクターやコーチの指導、およびスポーツプログラムを示すことから「指導者・スポーツプログラム」因子とした。第9因子は、運動技能や能力の向上を示すことから「技能向上」因子とした。

## (2) 大学生と一般の便益比較

図10に、スポーツに関する便益が大学生と一般によってどのように異なるかを示した。数値は、全サンプルの平均が0で、これを境として大きくなるほどニーズが強く、小さくなるほどニーズが弱いことを意味している。その結果、「スポーツ情報」( $p < 0.001$ )、「スポーツ仲間」( $p < 0.001$ )、「トレンド」( $p < 0.05$ )、「個別的・合理的トレーニング」( $p < 0.001$ )、「指導者・スポーツプログラム」( $p < 0.01$ )、「技能向上」( $p < 0.01$ )に関して有意な差が認められた。大学生は、一般と比べ「スポーツ仲間」、「トレンド」、「個別的・合理的トレーニング」、「技能向上」に関して便益期待が大きく、「スポーツ情報」、「指導者・スポーツプログラム」に関して便益期待が小さいことがわかる。

「スポーツ情報」に関しては、大学生は、学校という比較的スポーツが行われやすい場にいるので、情報も豊富に得ることができ、便益期待も低くなるため、一般と有意な差があったと考えられる。「トレンド」に関しては、大学生は流行に敏感であるという若者気質を表しているようである。これは、若い年齢層が流行に敏感であるという原田ら<sup>2)</sup>の研究結果と一致している。「指導者・スポーツプログラム」に関しては、大学生の因子得点が低く一般と有意な差があることから、あまり指導者には依存せず、そして、「スポーツ仲間」の因子得点が高く、一般と有意な差があることから仲間と楽しくやることに便益が高いことが考えられる。総務庁青少年対策本部編「現代青年の生活と価値観」<sup>11)</sup>においても大学生は、ほとんどの者が仲のよい友人グ

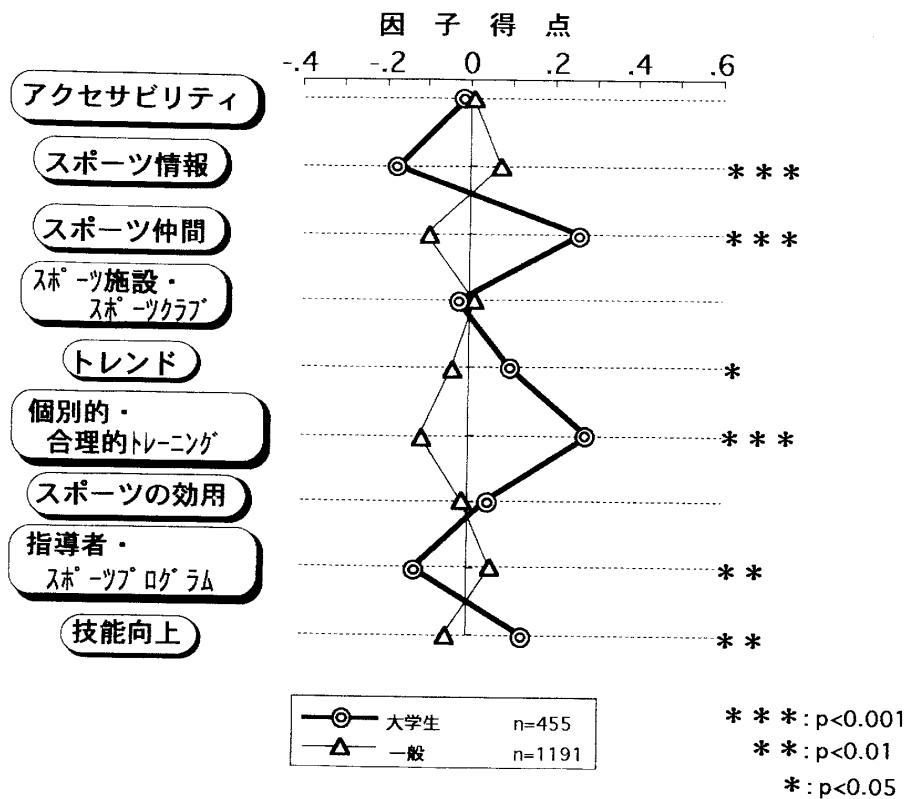


図10 大学生と一般のスポーツに関する便益期待の実態

ループを持っているという結果から大学生活における友人関係の持つ意味の大きさを強調している。「個別的・合理的トレーニング」や「技能向上」に関しては、大学生の因子得点が大きく有意な差があることから、ただ仲間と楽しくやるだけでなく、自分にあったやり方で上達することも期待していることも考えられる。

### (3) 大学生の男子と女子の便益比較

図11にスポーツに関する便益が大学生の男子と女子の間でどのように異なるかを示した。因子得点の尺度は、大学生と一般の比較で使用したものを利用した。男子の方が女子よりも、因子間で差があり、「スポーツ仲間」、「個別的、合理的トレーニング」、「技能向上」などの得点が大きな因子、「アクセサビリティ」、「スポーツ情報」、「スポーツの効用」、「指導者・スポーツプログラム」などの得点が小さな因子に別れた。男子は、それだけ片寄った内容に関しての便益期待が大きいことが考えられる。

男女間で有意な差があったものは、「スポーツ仲間」(p<0.05)、「個別的・合理的トレーニング」(p<0.001)、「スポーツの効用」(p<0.01)、「指導者・スポーツプログラム」(p<0.01)、「技能向上」(p<0.001)であった。

「スポーツ仲間」、「個別的・合理的トレーニング」は、女子においても平均点よりは因子得点が高いものの、男子の方が因子得点が高いことからより強く期待していることがわかる。また、「仲間」に関して、どのような仲間であるかということ、表3の便益期待の実態(単純加

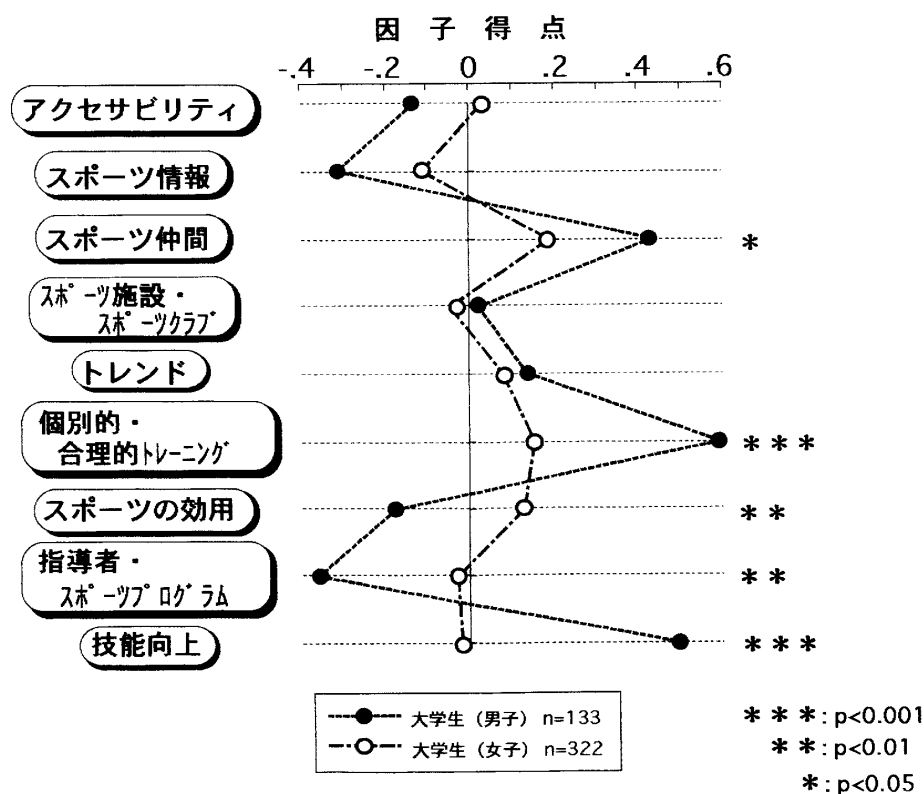


図11 大学生男女のスポーツに関する便益期待の実態

算平均)においてみると、大学生男子が、「スポーツにより友人・知人との親睦を図ること」という項目において得点が高くなっていることから、仲間は特に友人・知人であることが考えられる。

「スポーツの効用」は、大学生と一般を比べた際には差がなかったものの、大学生の男女に分けてみると、全体の平均を境に別れ有意な差もみられた。「効用」に関して、どのような効用かというのを表3でみると、男子に比べ女子は、シェイプアップなどの効用を期待していることがうかがえる。

「指導者・スポーツプログラム」、「技能向上」に関しては、女子は全体の平均とほとんど同じであることがわかる。大学生と一般を比較したときの差は男子によるものであり、男子においては指導者やプログラムに対して期待が小さく、技能向上に対して期待していることが考えられる。

表3 スポーツに関する便益期待の実態（単純加算平均と標準偏差）

	大学生男子	大学生女子	大学生	一般
<b>第1因子：アクセサビリティ（寄与率 29.7%）</b>				
シャワー・ロッカー・更衣室・トイレなどが充実していること	3.80 (1.08)	4.08 (.85)	4.00 (.93)	4.08 (.95)
施設が混みすぎでないこと	3.97 (.89)	4.14 (.82)	4.09 (.84)	4.13 (.87)
施設の職員や従業員の態度が良いこと	3.75 (1.04)	3.82 (.94)	3.80 (.97)	3.99 (.99)
スポーツをする場の雰囲気が快適であること	4.26 (.80)	4.29 (.72)	4.28 (.75)	4.17 (.83)
スポーツをするためにあまりお金がかからないこと	3.93 (.96)	4.12 (.80)	4.06 (.86)	4.01 (.94)
安全にスポーツを行えること	4.42 (.65)	4.36 (.77)	4.38 (.74)	4.29 (.83)
スポーツをする施設や場所までの交通の便が良いこと	3.68 (1.05)	3.76 (.90)	3.74 (.94)	3.86 (.98)
<b>第2因子：スポーツ情報（寄与率 8.2%）</b>				
いつどんなスポーツ教室やスポーツ行事が行われるのかという情報	2.80 (1.01)	3.03 (.90)	2.96 (.94)	3.07 (1.05)
どこにどんなクラブや同好会があるのかという情報	2.92 (.95)	3.03 (.92)	3.00 (.93)	3.06 (1.05)
どこにどんな指導者がいるのかという情報	2.48 (.99)	2.51 (.90)	2.50 (.93)	2.75 (1.06)
どこにどんなスポーツ施設があるのかという情報	3.33 (1.03)	3.36 (.88)	3.35 (.92)	3.44 (1.04)
練習やトレーニングの方法、スポーツに関する科学的な知識などの情報	3.15 (1.02)	3.01 (.89)	3.05 (.93)	3.04 (1.00)
健康や体力に関するスポーツ医学的な検査や相談が気軽に行えること	3.44 (1.06)	3.28 (.93)	3.33 (.97)	3.20 (1.02)
<b>第3因子：スポーツ仲間（寄与率 7.4%）</b>				
スポーツにより地域・近隣の人々との交流を深めること	3.38 (1.06)	3.23 (.97)	3.28 (1.00)	3.23 (1.01)
スポーツにより友人・知人との親睦を図ること	4.14 (.88)	3.91 (.87)	3.98 (.87)	3.65 (.94)
スポーツにより職場・仕事関係の人々と交流を深めること	3.94 (.98)	3.64 (.89)	3.73 (.92)	3.36 (1.06)
スポーツにより家族とのふれ合いを増やすこと	3.39 (1.17)	3.41 (.98)	3.41 (1.04)	3.27 (1.04)
<b>第4因子：スポーツ施設・スポーツクラブ（寄与率 5.8%）</b>				
スポーツする場所（スポーツ施設）が身近にあること	3.99 (1.04)	3.87 (.94)	3.90 (.97)	4.01 (.96)
場所（施設）探して苦労しなくて済むこと	3.83 (1.04)	3.85 (.92)	3.84 (.95)	3.88 (1.00)
一緒にスポーツをする仲間の集まり（クラブや同好会）が身近にあること	3.88 (1.07)	3.74 (.95)	3.78 (.99)	3.70 (1.01)
施設にスポーツ用具や器具が整っていること	4.05 (.90)	3.96 (.87)	3.98 (.88)	3.88 (1.01)
<b>第5因子：トレンド（寄与率 4.2%）</b>				
最近流行している、あるいは流行しそうなスポーツを行うこと	2.16 (1.06)	1.98 (.82)	2.03 (.90)	1.95 (.93)
流行やブランドもののスポーツウェアやスポーツ用品・用具でスポーツをすること	1.95 (.98)	1.83 (.87)	1.87 (.91)	1.88 (.95)
高級な施設でスポーツを行うことによって、高級感を感じることができること	1.62 (.76)	1.61 (.73)	1.61 (.73)	1.70 (.90)
スポーツをした後に、仲間とおしゃべりをしたり、お茶やお酒を飲んだりすること	3.70 (1.06)	3.50 (.99)	3.56 (1.02)	3.18 (1.12)
旅行先などで、好きなスポーツをすること	3.44 (1.08)	3.26 (1.02)	3.31 (1.04)	2.60 (1.13)
<b>第6因子：個別的・合理的なトレーニング（寄与率 3.4%）</b>				
自分のペースで練習やトレーニングができること	4.38 (.76)	4.21 (.79)	4.26 (.78)	4.02 (.86)
自分にあった内容の練習やトレーニングができること	4.30 (.76)	4.04 (.83)	4.12 (.82)	3.93 (.90)
練習やトレーニングを継続的に行うこと	4.04 (.92)	3.82 (.91)	3.89 (.91)	3.67 (.97)
練習やトレーニングを計画的に行うこと	3.71 (.97)	3.51 (.96)	3.57 (.97)	3.39 (.98)
<b>第7因子：スポーツの効用（寄与率 3.2%）</b>				
スポーツによって体力を維持・向上させること	4.19 (.86)	4.10 (.76)	4.12 (.79)	3.98 (.88)
スポーツによって健康を保つこと	4.24 (.84)	4.19 (.73)	4.20 (.76)	4.04 (.87)
スポーツによる美容や肥満解消（シェイプアップ）	3.05 (1.17)	3.81 (.92)	3.58 (1.05)	3.43 (1.12)
スポーツによってストレスの解消や気晴らしをすること	4.24 (.80)	4.19 (.80)	4.21 (.80)	4.08 (.87)
スポーツを楽しむこと	4.69 (.54)	4.45 (.77)	4.52 (.71)	4.26 (.83)
<b>第8因子：指導者・スポーツプログラム（寄与率 2.9%）</b>				
指導者が技術的にすぐれ、積極的に技術指導してくれること	3.33 (1.07)	3.38 (.96)	3.36 (.99)	3.35 (1.07)
指導者が、健康・体力づくりなどについて実際的な方法を指導してくれること	3.45 (1.08)	3.53 (.97)	3.51 (1.01)	3.48 (1.04)
指導者が仲間づくりなど面倒みがよく、グループ活動の楽しさを指導してくれること	3.64 (1.13)	3.66 (.90)	3.65 (.97)	3.51 (1.10)
気軽に参加できるスポーツ教室やスポーツ行事が開かれること	3.33 (1.23)	3.61 (.94)	3.53 (1.04)	3.57 (1.07)
<b>第9因子：技能向上（寄与率 2.5%）</b>				
スポーツの技能や記録を向上させること（うまくなること）	3.36 (1.09)	2.93 (.88)	3.06 (.96)	2.80 (1.09)
ひとつのスポーツ種目を徹底的に行うこと	2.71 (1.10)	2.65 (.86)	2.67 (.94)	2.69 (1.01)
競技成績や一定の技能水準に対して、表彰や認定を受けること	2.65 (1.15)	2.28 (.79)	2.39 (.93)	2.26 (1.00)

（各項目に対する回答 [1:まったく重要でない 2:あまり重要でない 3:少し重要である 4:かなり重要である 5:非常に重要である]の単純加算平均および標準偏差）

#### IV. ま と め

本研究の目的は、大学生のスポーツに関するニーズやウォンツを明らかにすることである。そのために、武隈<sup>13)</sup>の質問尺度を援用し、大分市全域に渡って成人を対象にアンケート調査を行った。そして、因子分析によりスポーツの便益の構造化を行い、①大学生と一般、②大学生男子と大学生女子での便益期待の比較を行った。

結果は以下の通りであった。

- 1) サンプルである大学生の特徴は、一般に比べ肉体的にも精神的にも暇やゆとりがあるようである。大学生男子は年齢的にみても体力的に自信があり、主にクラブ活動や同好会においてスポーツを行っているようであるが、大学生女子は一般と同程度である。そのためか、大学生男子はスポーツにある程度お金を使っているようであるが、女子はそうとはいえないようである。
- 2) スポーツに関する便益の因子分析の結果、9つの因子に別れた。因子負荷量の順に、「アクセサビリティ」、「スポーツ情報」、「スポーツ仲間」、「スポーツ施設・スポーツプログラム」、「トレンド」、「個別的・合理的トレーニング」、「スポーツの効用」、「指導者・スポーツプログラム」、「技能向上」であった。
- 3) 大学生と一般を比較した場合、大学生は「スポーツ仲間」、「トレンド」、「個別的・合理的トレーニング」、「技能向上」に関して一般よりも便益期待が大きく、「スポーツ情報」、「指導者・スポーツプログラム」に関して一般よりも小さかった。
- 4) 大学生の男女を比較した場合、男子は「スポーツ仲間」、「個別的・合理的トレーニング」、「技能向上」に関して女子よりも便益期待が大きく、「スポーツの効用」、「指導者・スポーツプログラム」に関して女子よりも小さかった。

以上のことから、大学生のスポーツに関するニーズやウォンツとして考えられることは、スポーツにより友人・知人との親睦が図れることで、特に大学生の男子においては、それぞれ個人にあったプログラムで、しかも技能向上が得られること、また、大学生の女子においてはスポーツによる効用が得られることが明らかになった。

### 参考文献

- 1) Haley, R.I. (1968) Benefit Segmentation : A Decision-oriented Reserch Tool, *Journal of Marketing*, 32, pp. 30-35
- 2) 原田宗彦・菊池秀夫 (1990) スポーツ参加者のライフスタイルに関する研究, *体育学研究*, 35, pp. 241-251.
- 3) 原田宗弘 (1991) スポーツの経済学的側面 —スポーツ消費者について—, *J. J. Sports. Sci.*, 10-4, pp. 248-252.
- 4) 菊池秀夫・原田宗彦 (1989) 民間スポーツクラブ会員のライフスタイルの構造 —性差と結婚の有無による差異について—, *鹿屋体育大学研究紀要*, 4, pp. 97-107.
- 5) 菊池秀夫 (1991) スポーツ・マーケティングとその研究動向, *J. J. Sports. Sci.*, 10-4, pp. 260-265.
- 6) Kotler, P. (1980) *Principles for Marketing*, Prentice-Hall Inc.
- 7) Kotler, P. (1982) *Marketing for nonprofit organizations*, 2nd ed., Prentice-Hall Inc.
- 8) 中西純司・浪越一喜 (1989) ライフスタイル・セグメンテーションにみるスポーツ消費者の実証的類型化, *体育・スポーツ経営学研究*, 6-1, pp. 21-35.
- 9) 中西純司・浪越一喜 (1990) ベネフィット・セグメンテーションによるスポーツ消費者の実証的類型化 —スイミングスクール経営への実践的示唆—, *いばらき体育・スポーツ科学*, 5, pp. 20-30.
- 10) Shimizu, T., Taimura, A., and Suga, M. (1993) A Structure of Sport Participation : From a viewpoint of Life Values and Lifestyle, Paper prepared for Proceedings of 36th ICHPER (International Council for Health, Physical Education and Recreation) in Yokohama, Aug. 18-22, now printing.
- 11) 総務庁青少年対策本部編 (1986) 現代青年の生活と価値観「現代青年の生活志向に関する研究調査」報告書
- 12) 武隈 晃 (1991) スポーツ・フィットネスにおける消費者ニーズの実態, *Sports Industry*, 6-3, pp. 38-44.
- 13) 武隈 晃 (1991) スポーツに関する運動者の便益構造 —スポーツ事業への対応化を中心として—, *鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編*, 42, pp. 79-97.
- 14) 鳥居直隆, 近藤礼一 (1974) ベネフィット・セグメンテーション, *ダイヤモンド社*